

自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2003年9月
No.33

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Published by Together with Africa and Asia Association (TAAA)

2003年9月の報告と予定

- 5月 MEIへ移動図書館運行の支援金を送金
- MEIへ本2750冊を送付
- 6月 南ア連絡員がELETと州教育省を訪問
- 7月 南ア連絡員が一時帰国
- 8月 南ア帰国報告会
- 南ア西ケープ州への車の輸入許可出る
- 9月 KZN州へ本2664冊を送付
- 10月 南ア連絡員南アへ戻る

目次

南アフリカ帰国報告	2
とある日のTAAA活動スケッチ.....	5
南ア新聞記事より	6
活動報告／西ケープ州・南ア教育賞受賞	7
寄付・賛助会費をくださった方々	8



移動図書館の中は本がいっぱい！（KZN州の小学校で）

南アフリカ帰国報告

平林 薫

(2003年8月3日 埼玉県労働会館での講演より)



移動図書館車を迎える子どもたち

新政9年目の南ア

アパルトヘイトが終わり、新しい国としてスタートして9年、南アフリカは着実に変化を遂げ、黒人層からも政界やビジネス界で活躍する人々が出てきている。電気、水道など基本的な設備や年金制度なども、各省庁の努力によってかなり改善されつつある。世界一危険な町と言われたジョハネスバーグは監視カメラの設置や警官の増員、再開発などによって生まれ変わろうとしている。しかしその一方で、変化に取り残され、貧困の中で生きる人々が圧倒的に多いことも事実。黒人層の失業率は相変わらず40%以上と言われており、地方から都市部への人口の流入も問題になっている。これといった産業のない地方は失業率が高く、都市部にやってくる、単純労働しかできない人々が定職を見つけるのは難しい。現在働き盛りの年齢層はアパルトヘイトの影響を受けているため、基本的な教育を受けていない人が多いからである。

古い校舎と不法居住地域の学校

新政府は教育に力を入れているが、どこから手をつけていいのかわからないといった印象を受ける。アパルトヘイト時代に黒人のホームランドと呼ばれていた地方の学校は、校舎があるだけで、白人の子供たちが通う学校には当たり前にある図書室や音楽室、体育館やプール、実習室などはない。今ではその校舎がぼろぼろになって、状況は悪化している。都市部に流入してきた人々が生活するのはINFORMAL SETTLEMENT と呼ばれる不法居住地域で、公共の土地に掘っ立て小屋を建てて住む。水道や電気はなく、衛生状態も悪い。火

事などが起こると、大きな被害が出てしまう。INFORMAL SETTLEMENT が大きくなると一つの居住区となり、そこにも学校が必要になってくる。政府は間に合わせの校舎としてコンテナを使ったりしており、移動式の簡易トイレ、水道は外に蛇口がぽつんとあるだけ、図書室などの設備もない。教育環境としては最悪だが、このような学校に生徒が2000人もいたりするのである。

TAAAの寄贈する本は、現地の教育関係のNGOや州教育省担当者を通して、そういった学校に配布され、教室の一つを図書室に改造したり、教室の片隅に“コーナー図書室”を設けたりしている。また分類、登録され、同じくTAAAが寄贈した移動図書館車に載せられて貸し出しが行なわれている。



順番に図書館車に入る

MEIの図書館車33校を回る

TAAAは現在、南アフリカの3つの州(ジョハネスバーグと首都プレトリアのあるハウテン州、ケープタウンのある西ケープ州、港町ダーバンのあるクワズルーナタール州)で行なわれている教育プロジェクトを支援している。MEIはジョハネスバーグから東へ25キロの金鉱の町ベノニにあるメソジスト教会ベースのNGOで、周辺の黒人居住区デベトンを中心に教育プロジェクトを行なっている。TAAAは移動図書館車1台と、定期的に本を寄贈している。現在、スタッフの白人女性アリソンと元教員のジョージ、ドライバーのアブソレムの3人を中心に活動し、移動図書館車は33校訪問している。昨年末に受け取った箱の中には多くの絵本や易しい英語のストーリーブックが入っていたことを大変喜んでいて。現在、移動図書館車は小学校を巡回しているため、できるだけ易しい本が喜ばれている。それらは早速コンピューターに登録され、図書館車に載せて貸し出しされている。

MEIを支援する私立高校

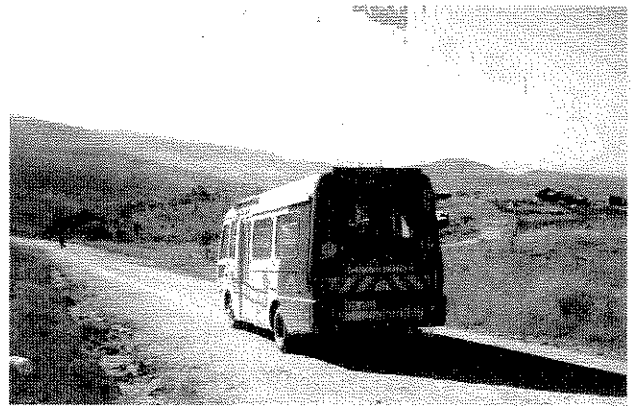
MEIはメソジスト教会の関係から、ジョハネスバーグ郊外の私立女子校のセント・アンドリュースと交流があり、5月末、6月末の合同ミーティングに参加した。セント・アンドリュース校では“ウバンビスワノ”というプロジェクトを設立し、土曜日にボランティアの先生がデベトンを訪ねて子供たちにスポーツや音楽を教えている。ウバンビスワノのマネージャーであるトレーシーは大変積極的に活動を行っており、学校内のみならず、一般企業へも寄付を呼びかけ、プロジェクトは着実に大きくなっている。これでTAAA、MEI、ウバンビスワノと3団体ががっちりスクラムを組んで、デベトンを中心に周辺の黒人居住区や違法居住地域への教育支援をする体制が整った。

さらにMEIへ1台とストリートチルドレンへ1台

MEIはもう1台図書館車を巡回させたいと考えている。その際にはセント・アンドリュース校からも資金、物資両面の支援が期待できる。将来プロジェクトを行なう予定にしている地域の一つはハウテン州とブマランガ州の州境にある金鉱山周辺の不法居住区で、居住区近くの農家の跡地に建てられた学校を訪問した。この日天気は良かったが風が強く、刺すような寒さの中、何人かの子供たちは裸足で学校に来ていた。教室は農場主から借り受けた納屋や作業所を改装したもので、学校と呼べる設備ではない。それでも、これまで学校に行けなかったり、何十キロも歩いて遠くの学校に通ったりしていた子供たちにとって、近くの学校で勉強できるということだけでも喜ばしいことなのだ。ジョハネスバーグにあるトワイライト・チルドレンという、路上生活の子供たちの世話をするNGOにも移動図書館車の寄贈を考えている。ここをベースに周辺の他のNGOやコミュニティーセンターへの本の貸し出しや寄贈を行なう予定。

クワズールーナタール州教育省、 教育図書情報技術サービス (ELITS)

6月中旬、クワズールーナタール州の移動図書館車プロジェクトを訪問した。同州にはTAAAより3台の移動図書館車が寄贈された。州の西部はドラケンス山脈が連なり、高いところでは2000メートル以上。中央部、東部には小高い丘が延々と続き、“千の丘の谷”という地名もある。



丘を越えて行く

3台のうち1台

商業都市ダーバンをベースに黒人居住区イナンダ周辺の17校を9月頃より巡回予定。この地域はダーバンからさほど離れてはいないのだが、学校の設備や交通の便が悪く、また少し奥に入ると図書館もない。巡回予定の5校を訪問したが、新設の1校を除き本がほとんどない状況。一つの小学校の先生から、本の寄付の依頼と共に、教育用のおもちゃ、例えば数や時間を習うような教材や粘土などの古いものがあつたらぜひ送って欲しいとの要請があつた。

2台目の車

州北部、バズワナの教育センターをベースに周辺40校を巡回予定で、現在州運輸省へのナンバー登録など準備も最終段階に入っており、こちらも9月頃よりプロジェクトを開始予定。この教育センターは民間企業と州教育省が半分ずつ出資して建設された。ここはモザンビーク国境に近く、情報、設備に乏しい地域といえる。センターには図書室、コンピューター室、実験室、会議室などがあり、予約を入れておけばクラス単位で設備を利用できる。訪問当日も、会議や、教材を取りに来た先生方でにぎわっていた。



授業の教材も貸し出す



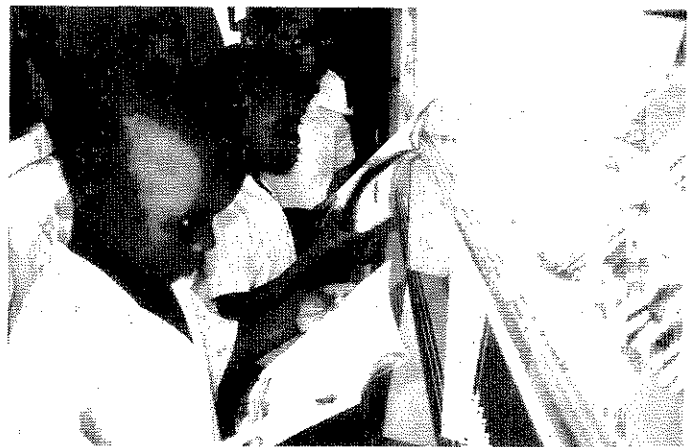
ダーバンよりウルンディへの道で

3台目の車

州都ウルンディをベースに15校を回っている。昨年11月の訪問時には故障してプロジェクトが中断していたが、浅見さんが送ってくださったパーツを使って修理され、順調に走っていた。ウルンディは州都といっても行政府があるのみで、周辺は特に産業もなく貧しい地域である。ウルンディ周辺は山岳地帯で、道路も悪いため、移動は大変。そのため、図書館車も1日1校のみの訪問で、週に5校、3週間で1サイクルとしている。周辺の学校では移動図書館車プロジェクトの話聞きつけ、自分達の学校にも巡回して欲しいという要望が多く寄せられているとのこと。学校訪問時には、教育省から学校へのお知らせや教材なども車に載せられ届けられる。ウルンディの図書館車は州の各省庁の建物内に保管され、近くのELITSの事務所に配車される。現在プロジェクトは、内勤が2名、図書先生が2名、ドライバーとボランティアの若い女性各1名の計6名で行なわれている。バスを掃除し、教材などを積み込んで出発。すぐに砂埃の立つでこぼこ道に入り、小山を上がったり下がったりいくつも越えて行く。牛の群れと牛飼いに会うくらいで、あたりは静まり返っている。図書館車は歓声を上げる子供たちに迎えられた。今回訪問したンシカイエムピロ小学校はグレード1-7までの生徒218人。校舎があるというだけの、設備の乏しい、典型的な田舎の黒人居住地域の学校である。周辺にはこれといった産業はなく、細々と放牧をするか、家族の誰かが町に出稼ぎして家計を支えている。そのような環境だけに子供たちは素直で子供らしく、都会から赴任してきた若い女性のグメダ校長先生も、“ここは何もなくて貧しいけれど、都会のような犯罪はないし、子供たちも素直で教育しやすい”と話していた。教育、衛生などに関しては都市部との格差が大きいため、私たちが当たり前のように持っているものや、知っていることが、ここの人々にとっては大変貴重であることが多い。

本に目を輝かす子供たち

この地域で自分の本を所有できる子供たちはほとんどいない。子供たちは図書館車の訪問を待ちわび、目を輝かせて図書の先生の話聞く。バスが到着すると、高学年の子供たちが教材などを運び出し、準備をはじめる。スタッフはサイドの戸を開けて本をきれいに並べる。他の移動図書館車プロジェクトと同様、ここでも貸し出しは先生方にのみ行なわれている。子供たちは低学年から順に図書館車の前に集まり、図書の先生から図書館や本の扱い方についてのズールー語でのお話を聞く。その後、先生がそれぞれの学年にあった本を一冊選んで朗読をする。最後に子供たちはバスの中を見学し、実際に自分で本を手にとってみる。特に低学年の子供たちが、初めて見るカラーの写真や絵が入った本を開くとき、なんともいえない表情をする。おそらく文字は読むことはできないだろう。けれども、本の魅力を、驚きと感動をもって一瞬のうちに理解したような目。その輝いた目を見るたび、改めてTAAAの活動に自信と誇りを持ち、もっともっとそんな目を見たいと思うのである。グレード7の生徒達まで一連の見学を繰り返す間、先生方は本や教材を選び、ELITSスタッフがチェックする。この日は男の子達が踊りを披露してくれて、女の子達は後ろで歌と手拍子を送る。足を高く上げ、地面を踏み鳴らすスタンプングは、もともと戦闘に出て行く男達が敵を威嚇し、士気を高めるもの。頭の上にも足が上がる身体の柔軟さとリズム感は驚くほどだ。お祭りなどではこの踊りが延々と続くのだが、踊れば踊るほど盛り上がり、疲れを忘れてしまうようだ。先生方に挨拶をして、子供たちに見送られ、移動図書館車は学校を後にした。クワズルーナター州教育省は、新しい国が変わっていく上で教育が最も重要であるという強い認識をもって仕事をしている。次回の本の寄付はELITSあてに送られることになり、TAAAの本は移動図書館車に載せられたり、学校に寄贈されたりと、有効に利用されることだろう。



本に見入る子どもたち（移動図書館車の中で）

とある日のTAAA活動スケッチ

下谷 房道

今日は月に一度のパッキングの活動日だ。10時集合だが、この時間にみんな集まっていることはまずない。それぞれの事情でポツポツやってくる。集まる人数も日によってまちまち。今日は総勢8名だった。場所は埼京線南与野駅から徒歩15分ほどの公文教室を借りている。生徒の机をかたづけて場所をつくるが8名いると作業もちょっと窮屈。

教室の外に物置が二つある。全国から寄せられた英語の本が一時、ここに保管されている。教室に運んで南ア向けにパッキングし直すわけである。今日の本の行く先はダーバン。いつも会の代表の野田さんはバイクに乗って一番乗りし教室に到着するのだが、今日はすでに新人の丸岡さんがドアの外で待っていた。老人ホームで働く村泉さんは夜勤明けに来られることが多い。今日は幸い夜勤明けではないそうだ。西村さんは5月に資金集めにやったフリーマーケットの中心人物。今年から会員制をとりはじめたTAAAの会員登録管理もやっている。梱包はプロの腕前なのが山下さん。アフリカに行って写真をとりたいたいそうだ。

メンバーの紹介は一時中断。私も作業にとりかからなくては。作業内容は本を詰めなおすことが中心だが、内容をみて関連のあるものをそろえたり、大中小と分けて数を数えたり、重さを量ったり、結構大変だ。今日は37箱できた。1箱平均して20kg。大きな本ばかりだと隙間があいてしまうので、小さな本が重宝する。文房具など送ってくださる方もいるが、これも隙間に入れている。

体を動かすと人間、お腹が減る。昼食の時間だ。今日の作業は午前中でおしまい。片付けて出前の昼食を食べる。「他の人の注文したのが自分のよりおいしくみえるな。」などといいながらパクついた。飲み物はみんなでルイボスティー。会の活動の相談や雑談など始まるが、ここで今日の残りのメンバーを紹介しよう。会計を一手に引き受けているのが安部さん。タイシャクタイショウヒョウなど、難しい専門用語を使いこなす会員から絶大な信頼を得ている。酔っ払って知らないうちに足をくじいたという浅見さんは副代表。会の活動当初からたずさわり、移動図書館車事業の中心。今回初めて来られた丸岡さんはHPをみて来られたという。TAAAのHPは見やすいとのこと。同じく初めてこられた武藤さんは平林さんの報告会に参加しての出席。茨城県の土浦市から英語の本も持参して。

さて、ここからは話し合いの場である。海外協力事業団（JICA・ジャイカ）の委託事業の件。ELE Tが行おうとしているHIV予防教育プロジェクトだが、TAAAが委託を受けて申請やら会計やら事業の監督やらを行おうというもの。また、JICAのもっている別の支援金「市民参加協力推進事業」への申請についても話し合った。この支援金によって南アの西ケープ州のジューン・パーチェスさんをお呼びしないか、という話。そのほかにも会員規約の文章の訂正などいくつか話しあって3時半くらいに解散した。心地よい疲労と充実感を感じつつ帰宅。次回の活動日を決めなかったなあ、とあとで思う。

今日来られなかったメンバーについては紹介できずに残念である。

南ア新聞記事より

もはや力を持たない NGO - 報告書 -

スター紙 (The Star), July 7, 2003
ペロシーニ・ゴヴェンダー記者

アパルトヘイト政策の重大な反論者であった教育関係の NGO は、民主主義に移行して以来、すっかり政府に依存する組織になってしまってきている。

人文科学研究協議会 (HSRC) のショーン・モローによる報告書によれば、民主主義への移行にしたがって、教育関係 NGO はだんだんその存在の意義が失われるばかりか、営利団体のようになってきているという。モローは HSRC における教育政策についての主任研究員である。「自由への闘いは、常に教育の分野に関わりを持っていて、皮肉なことに、政治的自由を勝ち取ったことによって、多くの教育関係の NGO が瀕死の状態に陥ってしまっている。」

資金源は多くの NGO にとって死活問題となった。

政府の再建開発計画が始められた時、市民団体も組み込まれることとなった。そのため、以前は NGO に直接流れるようになっていた資金が、政府の金庫に入るようになってしまったのである。

多くの組織は経済的に存続することが難しくなったり、抵抗勢力としての組織という意識からうまく移行できなかつたりした。

「存続している NGO は、政府に反対するのではなく、今や政府との協働でサービスの提供者になることにより生き残った。」とモローは述べる。

これは彼らが歩んで来た批判者としての、もしくは反政府としての立場からの大きな変化である。特に教育関係の NGO では組織の営利化が著しい。

民主主義になって 10 年経ち、直接の寄付や支援金が減少し、「批判の唱道」の必要性もなくなってきた今、多くの NGO が消えつつある。

NGO は、もはやなくてはならない関わりを持つ政府に従い、仕方なく、もしくは進んでサービス提供者として商業的組織へと転換するのであろうか。それとも時代遅れの過激な批判者としての立場を貫いていくのであろうか、とモローは問う。

「新しいタイプの NGO が出現する徴候がある」と彼は述べる。「もはや営利企業とほとんど見分けのつかないような組織から、あくまでも独立性を主張していくために、非商業的な資金を利用する混成組織まで幅広い。後者は新しい政府に対しても意見を異にし、批判を強めていくような組織である。」 (訳/山縣睦子)

アパルトヘイトという異常な状況の中で活躍してきた NGO たちが、アパルトヘイトが終わり、岐路に立たされているといえます。しかし、彼らの持つ実績とノウハウは、新しい形で生かされるべきだと思います。T A A A が共に歩んで来た E L E T などは、非政府組織であっても、これからは政府と協力をして (というより政府を指導するような立場で)、広く教育面でのサービスを提供して欲しいと願っています。

平林 薫

◆主な活動 (2003年5月16日～9月15日)

- 5/23 ホームページ改訂 大久保忠人
5/20～25 会報32号編集 山田玲子 野田千香子
5/29 MEIへ移動図書館運行資金を送金 野田
5/29 MEIへ本2750冊(57箱)送付 野田
6/2 埼玉県国際交流協会へ申請 野田
6/1～2 南アにてELET訪問 平林薫
6/4 クリスマンアカデミーインジャパンインターナショナルスクールへ本引取り 浅見克則
6/9 行田市より移動図書館引取り 北爪健一
6/9～12 南アKZN州教育省を訪問 平林
6/9 JICA打ち合せ会議 千葉愁子 安部弥生 野田
6/15 ダンボール200箱搬入 浅見
6/15 作業と会議 村泉巨竹 浅見 下谷房道 野田 山田 深野正己 倉野広 山下八千穂 Mogale
6/16 会報32号印刷 野田
6/18 会報32号発送作業 井出利栄 井出千亜紀
6/23 JICA申請準備会議 千葉 安部 野田
7/15 南アより一時帰国 平林
7/20 作業と会議 北爪 野田 下谷 浅見 村泉 山田 千葉 平林 西村
7/29 南ア大使館JETレセプション 野田 安部
8/3 行田市図書館より本引取り 北爪
8/3 南ア帰国報告会 平林薫
8/9 JICA打ち合せ会議 千葉 安部 野田 平林
8/21 河合塾、2003年度TAAAと活動協力決定
8/23 南ア西ケープ州への車輸入許可出る シューン・パーチェス
9/1 JICA打ち合せ会議 千葉 安部 平林 野田
9/4 クワズールーナタール州へ本2664冊(65箱)発送 野田
9/7 作業と会議 丸岡昌 村泉 野田 西村 下谷 浅見 武藤豊 安部
9/8 JICAへ申請書類提出 千葉
9/13～25 南ア訪問 千葉

西ケープ州・南ア教育賞コンテストで 「ズアール移動図書館プロジェクト」が受賞 お祝いへの返礼の手紙

千香子様

私たちの功績にお祝いの言葉を頂き有難うございました。あなたの方の寛大かつ親切な、移動図書館車のご寄付という事実がなければ私たちが受賞することはありえませんでした。

ズアール移動図書館車はズアールの恵まれない地域に寄贈されました。シューン・パーチェスさんがズアールの私たちの所へこのバスを輸送してくれました。私たちは図書館を欲しいと願ってきた人々に書籍を供給することを実現すべく、熱心に努めてきました。この夢が2001年に実現したのです。ズアール移動図書館は日常的にズアールのすべての学校を訪れています。またズアールのすべてのコミュニティにも巡回しています。ズアール移動図書館プロジェクトが順調に運んでいることを私たちは実に嬉しく思っています。1学期3ヶ月間に、約5千人の人々が本の喜びに接していることとなります。

西ケープ州教育省は南ア教育賞コンテストを実施しました。これはコミュニティ発展のプロジェクトに熱心に貢献している教師たちのために企画されたものでした。私J.ヘラルディンとJ.シヨハネ

ス校長がズアール移動図書館プロジェクトを実施しています。それがこのコンテストに該当しました。8月19日に最終選者に残り、南ア教育賞授賞式で2位を勝ち得たのです。

私たちの主たる目標は2年間取り組んできているこのコミュニティにおける読書力を高めることです。私たちは数百人の参加者の中から選ばれ、EMDC 審査委員会の質疑を受けました。彼等はズアールの取り組みに非常に感動したのでした。

授賞祝賀会はジョージのデンネオールドプライマリィで立食パーティの形で行なわれました。

賞状は教育省のグレッグ・ヴァン・シャルクウィック局長から渡されました。それは、私たちが誇りとしている優れた指導力を持って行なっているズアールの移動図書館プロジェクトの運営に対していただいたものです。

これまで援助をして下さったTAAA、日本政府、ブレッドライン・アフリカ、西ケープ教育省、エデュリスとエンジェン(石油会社)に感謝します。あなた方の私利私欲のない援助により私たちは賞を勝ち得たのです。私たちは心から感謝しています。

ズアールの図書普及の夢を実現させて下さったすばらしい日本の方々全てに愛を捧げます。

2003年9月 ジェネット・ヘラルディン

(訳/野田千香子)